

2021年4月25日主日礼拝

大井バプテスト教会

説教題「神の語りかけ ～あなたはわたしのもの～」イザヤ書43章1～5節a

主任牧師 加藤 誠

「ヤコブよ、あなたを創造された主は／イスラエルよ、あなたを造られた主は／今、こう言われる。恐れるな。わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」。

(イザヤ書43章1節)

教会の桜の木が新緑に変わりました。桜の花びらが美しく舞っていた時期と違い、今はもう桜の下を歩く人が立ち止まって木を見上げることはほとんどありません。

この三月末で教会管理事務の眞柄さんが退職されて、桜の花びらとガクの掃き掃除の奉仕が必要となり、七人の方が応募に応じてくださいました。雨風の強い日の翌朝は汗だくの掃除となります。そのため何度かお手伝いさせていただいたのですが、掃除をしながら思ったことは「桜の木は生きている！」ということです。大変な量の花びらとガクは人間にとっては「厄介もの」なのですが、しかし「桜の木の命の証し」に他なりません。桜の木は人々から見られていようといまいと、黙々と新しい緑を芽吹かせ、今日も、来年の花の季節に向けて力を蓄えているのです。人々が桜の花を喜んで桜の木を見上げるのは、一年のうちほんの二三週間にすぎないのですが、それ以外の十一か月間も、桜は神さまからいただいた大切な命を黙々と生きているのです。

スポーツ選手でもタレントでも、人びとは「華」を求めてその人が一番輝いている時だけ注目しますが、多くの場合、「華」が過ぎると誰も見向きもしなくなってしまう。人間の評価というものは、なんと自己中心的で、気まぐれで、無責任なものでしょうか。「使えない」とか「役に立たない」という言葉でどれだけの人が傷つけられてきたことでしょうか。そのような人間の無責任で愛のない評価の言葉とはまったく正反対に、神さまは一人ひとりの存在の大切さを覚えて、つねに愛と励ましの言葉を、ご自身の責任と体重をかけて語りかけてくださっています。

今朝のイザヤ書43章に記されている神さまの語りかけもその一つです。

このイザヤ書43章は、今から約二千六百年ほど前に預言者イザヤが神さまから聴き取ってイスラエルの人々に取り次いだ言葉です。この頃、イスラエルの人々はバビロニアに戦争で負けて滅ぼされてしまい、祖国から遠くバビロンの地に移住させられていました。人生にたとえるなら、それまで積み上げてきた財産、住居をすべて失い、呆然自失の中、言葉の通じない土地で、無一文からすべてをやり直すようなものでしょうか。せつかく神さまから大切に与えられた恵みを台無しにしてしまった。なんと情けない自分たちだろうか。深い後悔と惨めさと悲しみに打ちのめされ、生きることにすっかり自信を失った状態の時でした。

一方で、バビロニアは豊かな国で、経済も文化も祖国イスラエルに比べるとずっと豊かに発達していました。便利です。仕事もあります。食卓も豊かで、ビールも

作られていたようです。そういうバビロニア人の生活を見ていると、少しでも金を蓄えて良い生活がしたい。見えない神を礼拝するよりも、現実を生きる力を約束してくれる偶像の神々を礼拝する方がずっとご利益がありそうだと、人びとの心が揺さぶられていた時でもありました。

そのときに預言者イザヤが（正確にはイザヤのお弟子さんたちが）、かすかに小さく聞こえてくる神さまの語りかけを聴き取り、人びとに取り次いだのです。

「イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる。恐れるな。わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」と。

「贖う」とは「奴隷が自由になるための代価を支払うこと」を言います。この時、イスラエルの人々はまさに「鎖につながれた奴隷」のようでした。自分は役に立たないという惨めさの「鎖」、現実的なお金や権力の力にひかれる心の弱さという「鎖」につながれた奴隷の状態でした。ところが、自分ではその鎖を解くことができない。そのイスラエルを縛り付けている鎖から「神さま自身が犠牲を払って、責任をもって解放してくださる」。それを「贖う」と言います。親が子どものためなら、何でも犠牲にし、時に自分の命を削ることまでするように、神は私たちのことを心配し、大切に想ってくださっているということです。

「あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」とは、私たち一人ひとりの人生の最終責任者として立ってくださる神さまの宣言です。一人ひとりに命を与えられた神さまが「わたしの目にあなたは値高く、貴い」、「あなたが水の中を通る時も、火の中を歩く時もわたしが共にいるから、恐れるな」と呼びかけ、わたしが責任を持つと言ってくくださっているのです。

この神さまが「イスラエルよ、あなたを造られた主は、今、こう言われる」と語りかけられている時に、「今」という言葉が重く響きます。神さまの呼びかけは「今／今日」、私たちに向けられているのです。「昨日、聞きました」、「一週間前の礼拝で、聞きました」ではない。「今／今日」、「わたしに語りかけられている、神さまの語りかけ」として聞いて受け取っていくものなのです。そういう意味では、ここで「ヤコブよ」とか「イスラエルよ」と呼びかけられているところに、「加藤よ」と、わたしに向けられた呼びかけとして「今／今日」聴いていく時、神さまの語りかけがまったく違って響いてきます。

私たちの世界には、人びとの自己本位で無責任な言葉があふれ、そのために傷ついている人も多いです。その世界にあって、愛のない言葉に振り回され、傷つけられることなく、聖書が届けてくれる「神さまの愛の語りかけ」を、日々、真ん中に聴き取りながら、神さまから与えられた命の尊厳を大切にし、育み、愛していく。優しさと勇気をお互いに分け合っていく私たちでありたいのです。